

責任編集・吉川英明

鳴門秘帖

吉川英治全集
3

談社



吉川英治全集3 鳴門秘帖

著者 吉川英治

装幀 加山又造／蟹江征治

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―一二二
電話 東京九四五―一二二 (大代表)
振替 東京八一三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 和田製本工業株式会社
製函所 株式会社岡山紙器所
表紙 望月株式会社
本文用紙 王子製紙株式会社
函貼用紙 日清紡績株式会社

第一刷発行 昭和五十五年十二月二十日

定価 一六〇〇円

©一九八〇 吉川英治国民文化振興会 0393-46309-2253 (C)
落丁本・乱丁本はお取り替えます。(文芸)

吉川英治文学紀行

鳴門秘帖の旅

小松久子

乱岩に散る波の銀屑、あるいは
白い無数の渦潮、あるいは
青黒い渦——有名な大鳴門の
狂浪、渦の海峡である。周馬
の小舟は、渦まく海潮へ……





山容は、人間に、冷寂な反省と幽美な感激を与えるかのようであった。幽邃な光線と深い冷気が、山の神秘さをいっそう強めている。深山幽谷ということばが、この西日本第二の高峰、剣山に^{ふさわ}適しい。





討幕の声、回天の熱が、蜂須賀阿波守重喜の居城、徳島城を中心に燃えさかる。家中の士気も揃ってくる。幕府討て。大義にくみせよ。狼火が、いまにもあがろう。

目次

吉川英治
文学紀行（カラー） 鳴門秘帖の旅 小松久子

一

上方の巻

九

江戸の巻

二〇

木曾の巻

二四八

船路の巻

二九九

剣山の巻

四三八

鳴門の巻

四九〇

巻末特集

「鳴門秘帖」の思い出 原田伴彦

五五一

解説 大衆文学の記念碑 磯貝勝太郎

五五三

スパイ小説としての「鳴門秘帖」 向井敏

五五六

鳴門の碑 吉川英明

五六〇

別刷 吉川英治（一色オフ）
文学紀行（セット） 鳴門秘帖の旅 黒部亨

さしえ

堂

昌

一

鳴
門
秘
帖

上方の巻

夜魔昼魔

安治川尻に浪が立つのか、寝しずまった町の上を、しきりに夜鳥が越えて行く。

びっくりさせる、不粹なやつ、ギャーッという五位鶯の声も時々、——妙に陰気で、うすら寒い空梅雨の晩なのである。

起きているのはここの軒。青いものがこんもりした町角で、横一窓の油障子に、ボウと黄色い明りが洩れていて、サヤサヤと縞目を描いている柳の糸。軒には、「堀川会所」とした三尺札が下がっていた。

と、中から、その戸を開けて踏み出しながら——

「辻斬りが多い、気をつけろよ」

見廻り四、五人と町役人、西奉行所の提灯を先にして、ヒタヒタと向うの辻へ消えてしまった。

あとは時折、切れの悪い咳払いが中からするほか、いよいよ世間森としきった時分。

「今晚は」

会所の前に佇んだ二人の影がある。どっちも、露除けの笠に

素草鞋、合羽の裾から一本落しの鍬をのぞかせ、及び腰で戸をコツコツとやりながら、

「ええ、ちよつとものを伺いますが……」

「誰だい」と、すぐ内から返辞があった。

「ありがてえ、起きていますぜ」

後ろの連れへささやいて、ガラリと仕切りを開ける。中は、土間二坪に床が三畳、町印の提灯箱やら、六尺棒、帳簿、世帯道具の類まであって、一人のおやじが寂然と構えている。

「何だえ、今ごろに」

錫の酒瓶を机にのせて、寝酒を舐めていた会所守の久六は、入ってきたのをジロリと眺めて、

「旅の人だね」

「へい、実は淀の仕舞船で、木村堤へ着いたのは四刻頃でしたが、忘れ物をしたために、問屋で思わぬ暇を潰しましたんで」

「はあ、そこで何かい、どこの旅籠でも泊めてくれないという苦情だろう」

「自身番の証札を見せろとか、四刻客はお断りですとか、今日、大阪入りの初っぱなから、木戸を突かれ通しじゃございませんか」

「当り前だ、町掟も心得なしに」

「此言を伺いに来た訳じゃござんせん。恐れいりますが、その宿札と、事のついでに、お心当りの旅籠を一つ……」

「いいとも、宿をさしても上げるが……」と久六、少し役目の形になって、二人の風態を見直した。

「一応聞きますが、お住居は？」

「江戸浅草の今戸で、こちらは親分の唐草銀五郎、わっしは待

乳の多市という乾分だ」

「ああ、博奕打ちだな」

「どう致しまして、立派な渡世看板があります。大名屋敷で唐草瓦の窓元で、自然、部屋の数も多いところから、半分はまアそのほうにや違いありませんが」

「何をいつてるんだ」側から、銀五郎が押し退けて、多市に代った。

「しゃべらせておくと、きりのねえ奴で恐れ入ります。殊には夜中、とんだお手数を」

「イヤ、どう致して」見ると、若いが地味づくりの男、落ちつきもあるし人品も立派だ。

「そこで、も一ツ、行く先だけを伺いましょう」

久六も、グッと丁寧に改まる。

「的は四国、阿波の御領へ渡ります」

「阿波へ？ フーン」少しむずかしい顔をして、

「蜂須賀家では、十年程前から、ばかに他領者の入国を嫌って、よほどの御用筋か、御家中の手引でもなければ、滅多に城下へ入れないという話だが」

「でも、是非の用向きでござりますから」

「そうですね。イヤ、わしがそれまで糺すのは筋目違い。いますぐ宿証を上げますから、それを持って大川南の渡辺すじ、土筆屋和平へお泊りなさい」と、こより紙を一枚剝いで、スラスラと筆をつけた。

その時その間、何とも怪しい女の影。会所の横の井戸側にしゃがみ込んで、ジッと聞き耳をたてていた。

白い横顔、闇にツイと立ったかと思うと、

「どうも、ありがとう存じました」

中の声と一緒に戸が開いて、さッと明りが流れて来た。途端に、のしお頭巾の女の魔魅、すばやく姿を消している。

「あ、お待ちなさい——」会所守の久六は何思ったか、あわて、出かける二人を呼び止めた。

「え、何ですって？」

唐草銀五郎に乾分の多市、出足を呼び返されて何気なくふりかえると、

「気をつけて行くことだぜ、物騒な刻限だ」

会所の久六が、手真似でバツサリ、いやに小声で注意をする。

「フン、辻斬りかあ」多市が鼻ッ先で受けると、

「これ、冗談に聞きなさんな」と、久六は叱るように、「今しもここへ見た、見廻り役人の話では、刀試しじゃない物盗りの侍で、しかも、毎晩殺られる手口を見ると、掘物斬りの達者らしいということだ」

「ご親切様……」銀五郎は丁寧な会釈をして、スタスタと先へ歩きだした。

教えられた道すじどおり、堀川から大川河岸を西へ曲がる。所々に出水の土手壊れや化けそうな柳の木、その闇の空に燈明一点、堂島開地の火の見櫓が、せめてこの世らしい一ツの瞬きであった。

「親分」多市は、追いつくように側へ寄って、

「自身番のおやじ奴よけいなことを言やがったんで、何だかコウ背筋が少し寒くなった」

「おや、てめえはさつき、フン辻斬りかアと涼しい顔をしてい
たじゃねえか」

「そりや、関東者の病やまいでしてね」

「出るなど思う奴やつはとかく出たがる。多市、今からてめえの腕

前を頼んでおくぜ」

「鶴亀、いい当てるということがあら。第一、うちの親分は至
つてたのもしくねえ」

「なぜ」

「こんな時の要害に、永の道中、大枚の金をわつしに持たせて
おくんだからな」

「ばかをいえ、それほどてめえの正直を買っているんだ」

「エエ詰らねえ、明日あしたからは、少し小出しに費つかいこむコッタ」

無駄口を叩きながら、淀屋橋の上にかかると、土佐堀一帯、お

蔵屋敷の白壁も見えだして、少しは気強い思いがある。

その二人は知らなかったが、堀川会所の蔭に潜んでいた、の

いお頭巾の女の影はまたいつの間にか後ろをつけて、怪しい糸

を手繰たぐってくるのだった。

「おや？……」と、渡り越えた橋の袂たもとで、待乳まちちの多市、不意

にギクリと足をすくめてしまった。

「親分、誰か来ますぞ、向うから」

「人の来るのに不思議はない。いい加減にしろよ、臆病者」

「だが、しつかり、目釘めくぎを湿ぬして置いておくんなさいね」

「心配するな」笑いながら、さつさと足を進めると、なるほど

河岸かしのつぶちの間から、チャラリ、チャラリ……と雪踏ゆきふみを摺る音。

近づいた時、眸めを大きくして見ると、侍だ。はつきり姿の見

えない筈はず、上下黒ぞつきの着流しに、顔まで眉深まぶたなお十夜頭巾。

当時、宝曆ほうりき頃から明和めいわにかけて三都、頭巾の大流行り、男が
た女形おんながた、岡崎頭巾、露頭巾、がんどう頭巾、秀鶴頭巾、お小姓
頭巾、なげ頭巾、猫も杓子もこの風に粹すみをこらしめて、寒いばか
りにする物でなくなった。

チャラリ、チャラリと雪踏を鳴らして、今、銀五郎の左を横

目づかいにすれ違った黒縮緬くろしゆもんの十夜頭巾は、五、六間行き過ぎ

てから、ソッと足の穿き物をぬぎ、樹の根方へ押しヤツた。

かなぐり捨てた羽織もフワリとその上へ――。

と思うと身を屈かがめて、双の眼をやり過すごした闇へ――蠟色ろうしきの

鞆たもとは肩より高く後ろへ反そらしてスススと追い縋ひつたが音もさ

せない。

「ウム！」と据物斬りの腰、息を含んで、右手は固く、刀の柄つか

糸へ食い込んだ。

グイと前へ身をうねらせる。

斬るな――と思えたが、銀五郎の後ろ構えを、多少手強く思

つたのか、そこでは抜かずにもう一、二間。

すると、場合もあらうに、すぐ足もとの土佐堀で、ドボン！

と真ッ白な水けむり、不意を食わせて凄じい水玉がかぶった。

「あっ――」と音を揚げたのは待乳の多市。そのほうよりは、

後ろの死神に気がついて、

「親分ッ」と、銀五郎を突き飛ばしておいて、自分も宙を飛ん

でしまった。

「ちえっ……」舌打ちして戻りかけた侍、ひよいと淀屋橋の上

を仰ぐと、のしお形に顔を包んだ美しい女が、橋の手欄に頬杖つ

いて、こっちへニコリ笑ったものだ。

取って返し勢いで、十夜頭巾の侍が、びたびたと自分の影へ寄ってくるのに、橋の女は、その欄干に片腕もたせて澄ましたもの。

馴れない頭巾と見えて、うるさそうに、解いて丸めて川の中へフワリと捨てた。——ついでに、下からさつとくる風と、頭巾くずれの髪かみの毛を、黄楊きんぎょの荒齒あらはでざつと梳といて、そのまま横へ差しておく。

「女！」ズンと凄味すしみのある声だ。

いうまでもなく今の侍、逃がしたほうの身代りに、斬らねば虫が納まるまい。

「あい、わたしのことですか？」

小袂こたてを下ろした襟掛えりかけの婀娜あなは女はどこまでも少し笑いを含んで、夏なら涼んでいるという形だ。

「知れたこと、なんで邪魔邪魔いたした」

「邪魔をしたって？ アアそうか、今わたしが石をほうり込んだので、斬り損きりこなつた飛とばちりを持ってきたんですね」

「ウム、どこまでも承知しやうちでしたことだな」

「百もご承知、お前さんは、縮緬ちりめんぞきじやいるけれど、辻斬り稼かせぎの荒事師——、そう知ったからこそ横槍よこやりを入れたのさ。悪かったかい」

「なんだと」

「お前みたいな素人仕事に、あの二人はもったいない。どこか、河岸を代えたらいいでしょう」

「ウム……、じゃてめえもあれをつけてきたのか」

「それもおまけに江戸からだよ。双六すごろくにしたって五十三次、根よくここまですてきたところを、横からさらわれて埋まるか

どうか、胸に手を当てて考えてごらん」

「読めた、さては道中騙りか美人局の」

「いいえ、これでも一本立ち、お前さんも稼業人になるなら覚えておき、女掏摸めづもの見返りお綱おづなというものさ」

「あつ、お綱か」

「おや、わたしを知ってるの」

「——昨年江戸へ行った時、二、三度落ち合ったことのあるお十夜孫兵衛だ」

「まあ……」笑いまじりに寄ってきて、「それじゃ少し啖たん呵かが過ぎたね、早くいってくれりゃあいいのに」

「なアに、こつちがドジを踏み過ぎてゐる。それにしても、たいそう遠出をしてきたものだな」

「ちつと仕事が大きいのでネ」

「たしかに見込みはついているのか」

「お蔑あしみだよ、お綱さんを」

話してみると、ぞんざい口も、罪がなくって艶なまめかしくって、どこやら、国貞くにさだうつしという肌合はだあひ。この美しさが、剃刀かみきりの折れを指に挟はさんで働くとは、目の前にいるお十夜にも、思えば不思議な氣にされる。

「いけねえ、うっかりすると魅み入いれそうだ」冗談じやうたんに目をそらしたが、同時にはッとした色で、

「あ、向うから、また見廻り役人の提灯ちやうちんが来るようだ。ええ、うるせえな」と舌打ちした。

「逃げるなら、私にかまわず行っておくれ」

「なに、慌あわてることはねえ、支度はあるんだから」と、お綱を手招きして、橋の下を覗いたかと思うと、低い声で、

「三次——」と呼んだ。

返辞はなかったがその代りに、ギーと出てきた剣尖船、頬冠りの男が黙々と動いた。

役方の提灯が来た頃には、お綱と孫兵衛をのせた剣尖船、堀尻を南にそれて、櫓力いっぱい木津川をサッサと下っている。

あがった所は住吉村、森囲いで紅がら塗の豪家、三次すなわち主らしいが、何の稼業か分らない。湯殿から出て、空腹を満たして、話していると夜が明けた。

「——お先に、今夜のお礼をいっておきますよ。わたしたち仲間の紋切形で、仕事をするとその場から、ブイと百里や二百里は飛びますからね——お前さんも、たまには江戸へ息抜きにおいでなさいな。本郷妻恋一丁目、門垣根に百日紅があつて、挿花の師匠の若後家と聞けばすぐ知れますよ。エエ、それがわたしの化身なの」

お十夜にこういって、お綱はその日昼いっばい寝る。翌晩も、夜はブラリと出だして、昼寝する。なるほど、これではお嫁になれない性。

と思うと、四日目か、五日目。

朝風呂につかって、厚化粧して、胭脂を点じて、髪も衣裳もぞっくり直した見返りお綱。パチンと紺土佐の日傘を開いて、住吉村から出て行った。

どこへ行くのか、何を目星か、縦から見ても横から見ても、掴摸とは思えぬ品のよい御寮人様。

四天王寺の火除地、この間までの桃畑が、掛け小屋御免で、道頓堀を掬ってきたような雑聞だ。

日和はいいいし、梅若葉に幟の風、木戸番は足の呼び合いに声をからしている。

名古屋八の物真似一座を筆頭に辻能、豊後節の立て看板。野天をみると、江戸上りの曲独楽に志道軒の出店。そうかと思うと、呑み棒、飴吹き、ビイドロ細工、女力士と熊の角力の見世物などもある。

「さあ、いらいはいはい。ナガサキ南京手品ある。太夫さん、椿嬢、蓮紅嬢かけ合いの槍投げ、火を放けて籠抜けやる。看板に嘘ない」

唐人ぶりが珍らしいので、この前がまた大変な人だからだった。

「変つてやがる、べらぼうな入りだな、ちょッとのぞいて見ようかしら？　だが、待てよ……」

押し揉まれながら迷っていたのは、笠を首にかけた待乳の多市、片手で人を防いでいるが、片手は懐中の前を離さない。

親分の銀五郎は、今日も蜂須賀の蔵屋敷と下屋敷の方へお百度詣りだ。例の、阿波入りのため、便乗する関船手形、入国御免切手、二つを手に入れないならぬのである。

願書を出す、身元がいる、五人組証明をとられる、白洲で調べをくう、大変な手数。元は関船手形だけですんだ。こう厳密ではなかった。それにはわけがある。阿波の鎖国、徳川幕府の凝視——。だから銀五郎の用があつた、押しても渡りたい密境だった。

埒があくまで、多市は用なし、「たまにヤブラついて来い」とおつ放されたが、懐中にはちょッと重目な預り物、後生大事にかかえているので、肚から楽しむ気になれない。

「おっと、それどころじゃねえ」すぐ性根しやうこんになった。「この大金、もしものがあつた日にゃ、お眼がねで供をしてきた正直多市がどうなるんだ」とうとう南京手品なんきんてひんを諦めて歩きだした。

そして、西重門さいじゆうもんの側へ寄ろうとすると、楼門ろうもんの内から、ゾロ吐き出されてくる参詣人の中で、

「アー」と軽い叫びがする。

ひょいと見ると、上品づくりのお嬢様。揉みにじられた上、よろよろと、のめつてきた。

「あぶねえ！」

思わず支えて、多市が手を出すと、ボンと日傘が来た。女の体は風鳥ふうちようのように、胸を掠さらって後ろへ抜ける。

「ア、もし」

手に残された日傘をつかんで、多市が呼んだ。

女はもう五、六間。小走りに過ぎていたが、ふりかえって、ニッコリ笑った。——そのニッコリがまたばかに絢爛けんらん、菊之丞きくのじやうの舞台顔を明りで見たよう。

「もし、これを、傘を——」

「ア」女は遠くでうなずいた。

「いいんですよ」

「あれ……」

味な気もしたがまだ解げせない。

「よかアねえ、女持ちだ、貰ったところで始末に困ら」と、身を動かしした時初めて気がついた。

自分のふところから、晒木綿さらきわたんがガラリと二本はみだして出る。

二重に巻いた腹巻を、刃味はみも凄くタテに裂いた剃刀かみばさみの切れ口。

「あ！ 畜生ッ」

逆さかつかみにした日傘をふって、眼色をかえた待乳まちうの多市は、まっしぐらに駆けだした。

「スリだ、スリだスリだ！」

「ちぼ！ ちぼッ」

人の声だか自分の声だか分らない。西門唐門さいもんからんもんのまわり、七堂伽藍しちだうがらんを狂気のように走り巡った。と、出会い頭に、猫門の前で、バツタリぶつかった男が、

「おい、待ちな」と、軽く腰帶を取った。

「それどころじゃねえッ」

「まあ落ちつけよ、手配が肝腎だ、そうあがつて騒いだところで、めつたに捕まるものじゃねえ」

「何だい、てめえは」

「これだ」ふところを覗かせた。紺房こんぼうの十手がある。「目明し」と聞くと、多市は何思ったか、振りきって、また一散にそれてしまった。

「妙な奴だ、手配をしてやるというのにズレちまった。はてな？ ……」目明しの万吉まんきち、また何か幻想を描いて、根よくそこらを歩きだした。

屑くずが舞っている。堂塔どうたうは淡くぼかされて、人氣ひんしやうもない天王寺の夕闇を、白い紙屑が舞っている。

日傘が一本落ちていた、——破れた女持ちの傘。それを拾って、西門に立ったのが目明しの万吉で、